フイリピン滞在記 ⑱(最終回)---セブ島とカオハガン島を訪ねて

ルソン大学日本語教師 為我井輝忠

ついに11月8日の夕刻日本へ帰国した。楽しかったことも大変なこともたくさんあったが、ともかく帰国して現在2か月近くになる。前号で記したように、帰国少し前にセブ島へ出かけた。セブ島と共にこの近くにあるカオハガン島にも行った。カオハガン島には以前からマニラに住む知人から行かないかと誘われていたので、日本に帰る前に是非ともここには行ってみたいと思っていた。

カオハガン島は丸ごと、ある日本人が所有する島で、周囲20分も歩けば一周してしまう小さな島である。東京ドームくらいの大きさしかない。これまであまりこの島に関する情報がなく、どのように行くのがよいのか分からないでいたので、渡りに船とばかりにその誘いに乗ってしまった。

セブ島には10月27日に着いた。 マニラからLCCのエア・アジアで飛び、1時間半ほどであっという間に着いてしまい、マクタン島にあるセブ・マクタン国際空港からセブ・シティへタクシーで移動した。カオハガン島へは3日後に行く約束だったので、先ずは予約してあったホテルに滞在した。セブ島と言えば、リゾート地というイメージが強いが、本当のところこの周辺には観光客を対象にしたリゾート地はない。かなり離れたところに行かなければならない。今回はそのようなところは行かずに、セブ・シティに滞在することにし、前半2泊、後半3泊した。その間にカオハガン島へは2泊の予定であった。

カオガハン・ゲストハウスの母屋

前半はSummit Circle Sebu、後半はHarold's Hotelというホテルに滞在したが、どちらも街の中心部にあって、どこへ行くにも便利なホテルであった。セブ島は2回目の訪問でなので、前回訪ねたところは省き、今回は博物館、美術館、教会を中心に回ってみた。セブ・シティ博物館、スグロ博物館、オスメニャ記念館等の博物館やChurch of St. Thomas Villanuera, Church of St. Joseph the Patriarch, Redemptorist Church, Bradford Memorial Church, United Church of the Philippines等の教会を訪ねた。セブ・シティは人口60万を超え、大都市といった具合で、歩いていると、マニラにいるのと大して変わらなかった。

カオハガン島には10月29日から31日までの2泊3日で滞在した。マニラから来た知人と空港で待ち合わせ、マクタン島のマリコンドン港まで車で移動し、その後は船で島に渡った。通常この島へは定期船のようなものはなく、あらかじめ連絡をして迎えに来てもらわなければならない。30分ほどドーマー船に乗ったが、しばらくすると、サンゴ礁で出来た島が見えてきた。平べったく、ヤシの木で覆われただけで、他に民家が海岸寄りに固まってあるだけであった。

この島は崎山克彦氏が所有する島で、彼はゲストハウス(カオハガン・ハウス)を経営し、島の人々に働く場を提供したり、女性にはキルトを作る指導をしたりして、収入を得る機会を与えている。この島で作られるキルトは素晴らしく、最近は日本でも売られているそうだ。彼はもともと出版会

社に勤めていたが、60歳の時に辞めて、フィリピンに来て、この島が気に入り1000万円でこの島を買い取ったそうだ。彼の『何もなくて豊かな島―南海の小島カオハガンに暮らす』(新潮社)と言う本を何年か前に読んだことがあり、大いに感銘を受けた。それで一度来てみたいと思っていたが、やっとその念願が叶った。帰国後、『南十字星に針路をとって―ヨットで巡る何もなくて豊かな島々』や『青い鳥の住む島』を購入して、さらにこの島のことや崎山氏のことに興味を持った。

今回崎山氏が経営するゲストハウスに宿泊した。ゲストハウスと言っても電気はなし、バストイレも屋外にあり、不便極まりないところであったが、不思議と心地よさを感じた。滞在中は島の中を歩いたり、島の人の家々を訪ねたり、海岸でボケッとしたりして、観光施設等がない、正に何もない島の素晴らしさを堪能した。食事は周辺で獲れた魚介類を中心にしたもので、素朴な味わいがよかった。ただ野菜類は島で栽培していないためマクタン島から購入してくるそうだ。それに水道はない。飲料水は他から運んでくるが、日常使う水は雨水をためたものだそうで、シャワーやトイレは使えるが、気を付けて使わなければならなかった。島民の家を訪ねると、どこでも大きなドラムカンが数個置かれていて、雨水をためるために使っているようだった。

カオハガン島を丸ごと購入した崎山克彦氏

カオハガン島の遠景(崎山氏提供)

島ではどこに行っても心地よい風が吹いていて、エアコンなど必要ない。夜間は一段と涼しい風が吹き、涼しすぎるほどであった。エアコンが置いてある家など一軒もない。すべてが自然のままである。この島にいると、時間の流れがゆったり動いているような感じがする。ここにいる間は時計はいらなかった。すべてを時の流れるままに任せていればそれでよかった。都会の生活で身の回りに付いた汚れが取り払われたみたいである。もっと長くいたいとさえ思った。

しかし、いいことずくめではなかった。最近、島には少しずつながら観光客が来るようになり、かれら目当ての屋台や食堂ができ、騒々しくなって来た。この島にやって来る観光客は中国人が多いようだ。現に私がいる間にも彼らの姿を見かけた。また、人が増えることによってごみが大量に発生し、島のあちこちにゴミが放置されていた。島にはごみを処理する施設がないのだ。この島もいずれは本格的に観光化し、人がたくさん来るようになるだろう。出来るならば、ほどほどの観光客が来る程度で、今の島の静けさや素朴さを残していってほしい。これは一人の旅人の願いに過ぎないだろうか。数年後にはまた来てみたと思う。どんな風に変わっているか見てみたい。

(終わり)